

よりの村落にて、森下町の地より追出したりとの説は非なるべし。

○龜田與助傳

もと龜甲屋與助と呼べり。與助は世々の俗稱にて、河北郡井家庄森下村の館主龜田大隅岳信の子孫也。三壺記に云ふ。昔足利高氏將軍の時代より、加州河北郡森下村に、龜田殿として近郷を押領して、大永の頃まで家盛んなり。越前の朝倉氏加州を併呑せんと、密に龜田大隅に通ず。于時石川郡松任に鍋木右衛門太夫とて、是も近郷を押領して其の威盛んなりければ、鍋木を謀りて女婿となし、鍋木父子を森下へ招き、酒宴饗應の座にて殺害す。此の事より起りて加州の一揆共蜂起し、森下へ押寄せ、龜田が一類悉く討亡したり。此の時男子一人討洩され、方々經廻り、後には柴田勝家に扶持せられ、溝口半左衛門と云ふ。勝家滅亡の時越前にて切腹す。此の子淺野但馬守に扶助せられ、度々武功を顯しけるに依りて、鐵炮大將と成り、龜田大隅と稱し、後法弊して鐵齋と號すと見ゆ、關原政春の古兵談には、森下村の一揆大將龜田大隅は、武勇人に勝れ、柴田勝

家の手にも合ひ兼ねたり。依りて勝家より和談をなし、溝口半丞を人質に遣はし禮を爲したり。其の時の容体宜しきとて、半丞を大隅掣とす。其より半丞溝口を改めて龜田となし、後大隅と稱し、晩年に鐵齋と號す。此の鐵齋は元尾州の二寺と云ふ處に居たる溝口善左衛門と云ふ者の子にて、勝家の子小姓を勤め、後同苗柴田伊賀守に仕へたりと。則ち鐵齋物語の由或人語る。とあり。三州志變餘考には、龜田小三郎岳信は又大隅と號す。天正八年柴田勝家賀賊を征討せし時、猶森下に在りて、若林が伴り殺さるに懲りて、勝家猛攻すれども死力を竭して撓まず。故に勝家上村六左衛門をして強ひて講和せしめんとす。龜田質を乞ふ。然るに質たらんといふ人なし。溝口千熊固く請うて行き質となる。因りて龜田來りて之を謝す。勝家殺さんとす。龜田勇にして且口給なり。故に自解して死を脱し和す。龜田は溝口千熊の勇敢を感じ、即ち女婿とせんと乞ふ。勝家之を許す。一説に、此の時岳信に自刃を示すに、岳信千熊の勇敢を羨し、己が介錯を爲さしめ、且岳信の女婿となす。故に千熊後に其姓名を襲ひ、龜田大隅高綱と號すと也。千

熊は勝家の家老溝口半左衛門が子也と。今森下の大隅古墳と呼ぶものは、岳信の墓なり。金澤の染工龜甲屋與助が先祖是也。又森下の邑長金右衛門も此の末孫なり。といへり。又三州志古城考に云ふ。河北郡森下殿館は龜田大隅岳信居す。金澤染工龜甲屋與助先祖は、岳信の質子なり。微妙公之を憐み給ひ、龜田を龜甲と改め町人となす由。即ち與助由緒記に見ゆ。とあり。平次七世の祖盛昌の三壺記の朱書に云ふ。龜田鐵齋の子龜田權兵衛に妾腹の男子あり。寛永十七年七月權兵衛、盜賊の爲に金澤居邸にて討たれたり。此の時彼の男子を奥村伊豫へ預け置かれ、武功の者の子孫なれば、御取立も可被成との思食しもありけん、伊豫方にて成長せしめ、伊與の與字を讓りて與助と稱す。後にて如何なる事にや町人と成り、龜田氏を龜甲屋と書替へて、于今金澤森下町に龜甲屋與助とて紺屋たり。龜田の子孫無紛也と。私に曰く、龜田の田の字の下を長く引きたるなるべし。といへり。今按ずるに、龜田權兵衛は龜田大隅鐵齋の孫にて、龜田大隅の正統なる子孫なりし事知られけり。但し今其の家に古書・古傳記等も傳來せず。僅に後世書

き記しける由緒・來歴書を持ち傳ふるのみなりといへり。故に今考證の爲め二代龜田大隅高綱の武功書を左に記載す。又天正四年龜田小三郎集信等が刑部卿法印に宛てたる印書(二本通寄来度)は、卷一府城濫船の條に載せり。

龜田大隅一代之内働之覺

一、柴田勝家越前入城之刻、國中一揆共發候而、勝家に手向仕候付、佐久間玄蕃允に先陣を被申付候へ共、子息伊賀守先陣望、兩人先懸被申候。其時大隅守は溝口半丞に而、十六歳に罷成候。惣手之先を懸、白木戸川原に而一番に馬上に而鎧付、首打取、深疵負候處を、神谷太郎左衛門跡より乘來、馬に助乘せ本陣に歸候。此段神妙之由にて、柴田父子兩判之感狀有之事。

附、此神谷儀は大隅しうと也。加州中納言殿に居申候信濃親に候。右之働能存候者は、京極殿に小足掃部と申者前後能々可存候。

一、越前丸岡之城には柴田伊賀守被居候。端午之御禮に、父子共に安土へ被致參上、私供に罷越候。其跡に而一揆三千許に而城を取巻、二、丸迄乘取候由安土に早馬注進に付、